

# チョウザメ類とマグロ類： 古典籍データベースから探る 漢字の「鮪」の意味の変遷

東海大学海洋学部  
水産学科生物生産学専攻  
武藤文人

# マグロってなに？

- まぐろ
  - 一般用語
  - 行政用語
- Tuna
  - カツオも含む
- 漢字の「鮪」
  - 現代日本ではマグロ類

# 漢字の「鮡」の本来の意味

- 李時珍の「本草綱目」などを見ると、明らかにマゴロ類ではない。シナヘラチョウザメでは？
  - そう考えた先人もいるはずだ。



- 築地のお魚博物館の館長の坂本一男氏のエッセイによると、シナヘラチョウザメ(坂本 2000).
  - 阿部宗明氏と菅原 浩氏が「魚名の由来」の一部にその経緯を出版予定だったが、果たさずして無くなった(坂本一男氏, 2010年12月10日私信).
- 本草学と分類学の切り替わる時期の人？

# 関連人物1

- 岸上鎌吉(1867～1929)
  - 日本の水産学研究者の嚆矢.
  - マグロ類などの魚類, エビ, アワビ, クラゲ, サンゴ, カブトガニ, クモ, 水産増養殖, 漁具漁法学, 海水中の塩分, 考古学, 民俗学, など.
  - 四川省で探検旅行中に死去.

## 関連人物2

- 木村 重 (1901～1978)
  - 岸上氏の教え子, 元部下.
  - 博学な魚類学者.
  - 日中の古典籍に詳しい.
  - 上海自然科学研究所で勤務.
  - 戦後, 上海から引き上げる.

# 漢字の鮪の意味の変遷を資料から たどってみる.

- 中国古典籍
- 日本古典籍
- 古典籍研究論文
- 魚類に関する生物学的文献

通常の読み方との違い

- × 古典籍読解の経験が絶対的に不足している.
- × 古典籍の精神的意義, 哲学的考察などは全く考慮していない.
- 生物学, 生物地理学的知識は一応ある.

# インターネット情報源を活用する.

- 大学図書館のデータベース
  - 早稲田大学古典籍データベース
  - 中村学園蔵書
- 中国哲学書電子化計画収蔵
- 国立国会図書館
  - 近代デジタルライブラリ
  - 貴重書画像データベース
  - デジタル化資料
- その他（長野電波技術研究所など）

インターネット発信の情報ではなく、印刷物の情報を利用する.

# 関連する漢字表記の一覧表

漢字	発音
鮪	い
王鮪	おうい
叔鮪	しゅくい
鰯	らく
鰯子	らくし
鱒	しん
鱒	しん
鱒	てん
鮫	こう

- 古典籍の鮪の同義語, 類義語は左の表のようになる.
- 表示発音は諸橋徹次の「大漢和辞典」に典拠.
- 現代日本ではマグロ, チョウザメ, エイ, サメに使われる漢字が多い.



# 中国の古典

- 周禮
- 詩經
- 爾雅
- 爾雅注
- 經典釋文
- 爾雅注疏
- 本草綱目

# 周禮(しゅらい)

- 中国の古代王朝の周の，あるいは周を理想国家と仮託した儀典書.
- 紀元前1000年成立？
  - 仮託とすればもっと新しい.
- 「春獻王鮪」とあるが，魚種特定につながる記述はない.
- 周は現代中国の一部，黄河・揚子江流域.

# 詩經(しきょう)

- 中国の古代の詩歌の集成.
- 鱸鮓發發(てんいはつはつ).
  - 場所は黄河.
- 匪鱸匪鮓 (ひてんひい)
  - 場所は黄河と長江.
- 何らかの淡水魚.
- 魚種の特徴は無い .

# 爾雅(じが)

- 紀元前2世紀頃？
- 「釋魚 鯉 鱸 鰻 鯢 鱧 鮠 鯊 鮓 鮒 黑鮪  
鱮 鱠 鰓 大鯛 小者鮓 鮓 大鱈 小者鮓 鮓 大  
蝦 鯢 魚子 鱈 是鰓 鰓 小魚 鮓 鮓 鮓」
- 魚類については単語と、まれに同義語が示されるのみ.
- 魚種推定不能.

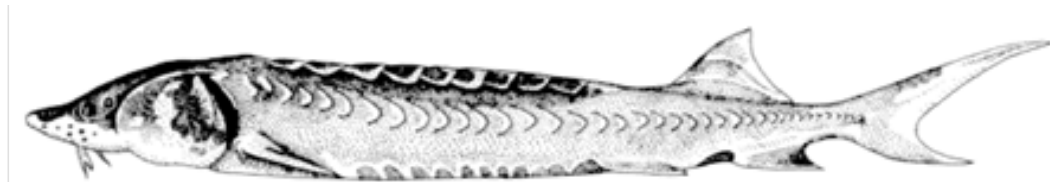
# 爾雅注(じがちゅう)

- 著者は郭璞(かくはく, 生没年276-324).
- 3-4世紀頃.
- 爾雅の注釈書.
- 記述が増えて, 魚種推定が可能に.
- 「今江東呼為黃魚」
  - 今は揚子江下流域で黄魚と呼ばれる。
- 鱸, 鱠, 王鮪, 叔鮪, 鮓子はチョウザメ類.

# 揚子江下流域の大型魚類

- 生物地理による魚種の絞り込み.
- 淡水魚の組成は比較的単純, コイ科が優勢.
  - コイ科
    - ソウギョ, アオウオなど
  - ナマズ科
    - ナマズ
  - チョウザメ類
  - 黄河も同様
  - 黒竜江に分布する魚種は除外される
    - サケ
    - ダウリアチョウザメ

鱧 鱧大魚似鱧而短鼻  
口在頷下  
體有邪行甲無鱗  
肉黃  
大者二三丈  
今江東呼為黃魚



ダブリーチョウザメ

鱧大魚似鱧而短鼻  
→「鱧は鱧に似て鼻が長い」



シナヘラチョウザメ

鮪 鱧属也→鱧に似た物？  
大中小の王鮪，叔鮪，鮨子は成長段階？



カラチョウザメ

# 經典釋文(けいてんしゃくもん)

- 陸徳明 (583)
- 鱸すなわち黄魚である.
- 鱠は字林に言う長鼻魚である. 重量は千斤.
- 鮪は字林によると鱠と同じもので, 鱸に似るが鼻が長く体に鱗や甲がない.
  - シナヘラチョウザメ
- 北宋(960-1127年)の邢昺(けいへい)による爾雅注疏(じがちゅうそ)などに連綿と引用される.
- 本体が失われた「字林」の内容も伝わっていく.



# 本草綱目（ほんぞうこうもく）

- 李時珍(りじちん; 1578)
- 後世に強大な影響力.
- 鱚魚と鮪魚は同一, とする.
- 鱚の字は爾雅や爾雅注には表れない.
  - 經典釋文によれば鱚の音は尋と淫の2通り.
  - 諸橋(1968):「暁讀書齋雜錄」から「鱚, 俗作鱚, 字書無鱚字」を引用
- 体背面は暗色で体腹面は明色, 吻は長く躯幹部とほぼ同等, 口は顎の下にあり, 肉は白い.



図: Duméril (1869)

# 中国古典文献



- 「鮪」の示す魚種は，漠然とチョウザメ類と推定されたり，あるいはカラチョウザメ，ダブリーチョウザメやシナヘラチョウザメと推定された。
- 各文献ごとに異同がある。
- マグロ類とは全然関係が無い魚種。

# 日本の古典

- 古事記
- 日本書紀
- 万葉集
- 和名類聚抄
- 本朝食鑑
- 和爾雅
- 大和本草
- 和漢三才図会
- 本草綱目啓蒙
- 日東魚譜
- 古今要覧稿
- 魚鑑

# 古事記

- 712年, 朝廷に献上
- 志毘/斯毘(しび)
- 5世紀のはなし.
- 「大魚(おうお)」の名を持つ娘, その娘に惹かれた平群(へぐり)家の若者「志毘(シビ)」, 同じくその娘に惹かれた皇子
- 人/魚の両義的な志毘と大魚(おうお)について, シビが大魚(たいぎょ)の一種であることもふまえた和歌による掛け合い

# 日本書紀

- 720年成立
- 古事記と似たような内容
- 「平群真鳥大臣：へぐりのまどりのおとど」の「男(=息子)」の「鮪(しび)」
- 鮪のよみ＝「茲寐」および「思寐」
- 魚種は特定できない

# 万葉集

- 鮪(しび)の漁を織り込んだ歌がある.
- 山部赤人
  - ...藤井乃浦尔 鮪釣等 海人船散動...
  - ...ふじいのうらにしびつると あまびとさわぐ
  - ...
- 大伴家持
  - 鮪衝等 海人之燭有 伊射里火之...
  - しびつくと あまのともせる いさりびの...

# 記紀萬葉の時代，まとめ

- 古代から、「シビ」と呼ばれる魚がいた.
- 日本書紀や万葉の完成した8世紀ころからそれに漢字の「鮪」が当てられることもあった，
- 志毘や鮪の魚種特定が出来る記述は無い.
- 「大魚よし」や「鮪衝く」＝「銚で突き止めて捕獲する」という漁法から，大型の魚種.
- 万葉集の記述からは明らかに海産魚.

# 和名類聚抄(鈔)

- 承平年間(931-938年)
- 源順(みなもとのしたごう)
- 「鮪 食療經云鮪 音委 一名 黄頰魚  
和名之比 爾雅注云 大為王鮪 小為  
叔鮪」
- 魚種の特徴記載なし.



# 本朝食鑑

- 人見必大(1695)
- 大鮪(おおしび)を1-2丈(約3-6m),  
小鮪(こしび)を7-8尺(約2.1-2.4m),  
真黒(まぐろ) 4-5尺(約1.2-1.5m),  
目鹿(めじか) 2-3尺(約60-90cm)
- 現代のマグロ類にも通じる呼称.
- この頃までには鮪＝マグロ類となっていた.

# 和爾雅

- 貝原好古(1694)
- 貝原益軒の兄の子，益軒の養子となる。
- 爾雅注に沿った簡略な記述，フリガナつき
- 鱒魚(シビ)，王鮪(ヲホシビ)，叔鮪(コシビ)
- 鱒や鮪をマグロ類とみている。

# 大和本草1

- 貝原益軒(1709)
- 鮪(い)を鱒(じん)の異体字として、志毘(しび)とは別項目を立てる.
- 志毘は、記述内容から判断してマグロ類.
- 大型魚が「しび」、小型魚が「まぐろ」、最小魚が「めじか」.
- 主として北九州のマグロを元に、漁法を含めた志毘の記述がなされているようである.

# 大和本草2

- 本草綱目の鮪の記述を検討.
- 以前より「鮪」を日本の志毘の字にあてているが、合致する魚種は日本にいない, とした.
- 鮪とすべき種に, 李時珍の鮪とは別種がいてそれが日本のシビに等しい可能性にも言及.
- そうであれば, 爾雅注の王鮪はしび, 叔鮪はまぐろ, 鮨子はめじかに相当するとした.

※他の日本の本草学文献と別格の詳細な論考.  
「大和本草諸品圖 下」の鮪はかなり稚拙.  
中村学園 貝原益軒アーカイブの図を参照

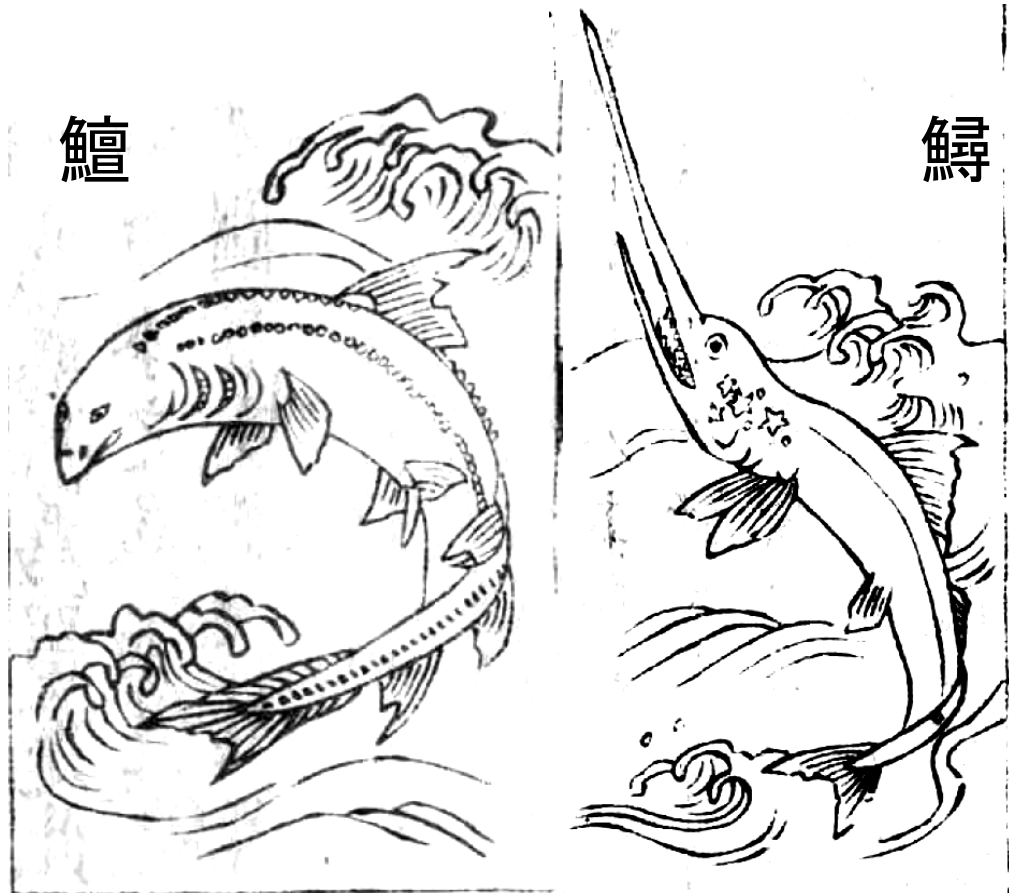
# 和漢三才図会1

- 寺島良安(編)(1712), 105巻81冊
- 巻第五十一, 「江海無鱗魚」に掲載.
- 「鮪」の訓に「しび」と「はつ」を, 音に「委」(い)を, 中国語の読み「ヲイ」を示す.
- 大きさ順に之比(しび)あるいは波豆(はつ), 末黒(まくろ), 目黒(めくろ), 目鹿(めじか).
- 王鮪は之比または波豆, 叔鮪を目黒, 鮎子を目鹿と同定.



# 和漢三才図会2

- 鱒(じん)を「かじとおし」すなわちカジキ類と同定し、鱣(せん)を「ふか」すなわちサメ類と同定.
- 図は中国の本草書記載にあわせて部分的に誇張

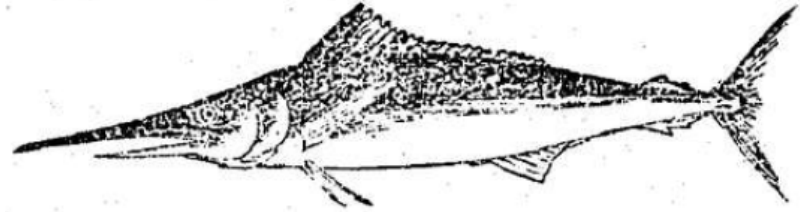
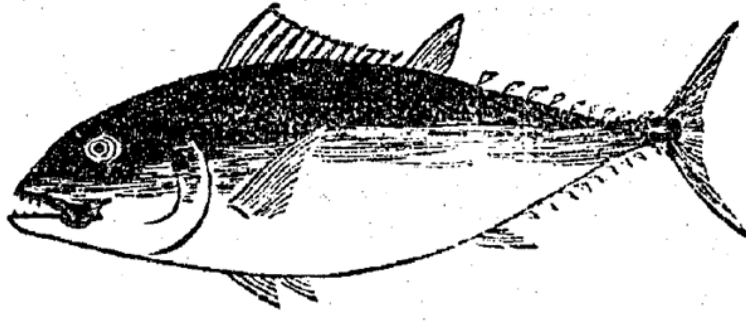


# 本草綱目啓蒙



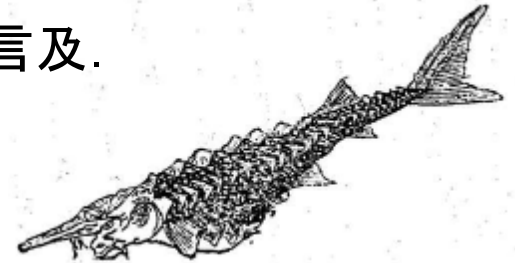
- 小野蘭山(1803-1805)
- 中国諸文献の内容を示しながら、鱣魚を「此條未ダ詳ナラズ」とした。似たものとしてゾウギンザメあるいはテングギンザメを示す。
- 鮪は鱣魚の中にまとめられている。
- 鱒魚を「詳ナラズ」とし、カジキとするのは間違いと指摘する。
- 「魚脂」の項に金鎗魚(ハツ)を載せている。

# 古今要覧稿



「志び」(左), 「かじ(き)とほし」(右), 「てふさめ」(下). 画像は国立国会図書館近代デジタルライブラリ収蔵.

- 屋代弘賢(編)(1821-1824)
- 「志び」を掲載.
- 鮭, 鮓, 鱒のいずれをも「かぢとほし」に同定.
- 「かぢとほし」は記載からカジキ類, 特にマカジキを示しているようである.
  - シロカジキ, クロカワカジキ, メカジキについても言及.
- 王鮭, 叔鮭, 鮓子もまた「かじとほし」に.
- 鱶(てん)は「てふさめ」に同定.





# 本草学の時代，まとめ

- 鮪は慣習的にマグロを示すようになった。
- その用法は，遅くとも本朝食鑑の時代には確定的に。
- 本来の鮪が日本には分布していないことは，日本の本草学者の一部は気がついていた。
- 本来の鮪の正体についてはサメ類やカジキ類など混乱が生じた。

# 「鮪(い)」の魚種同定を行い得た人物

- 日中の本草学書を読んでいる.
- マグロ類の分類学的知識がある.
- 中国産淡水魚類の分類学的知識がある.
  
- 田中茂穂, 岸上鎌吉, 木村重
  - 田中氏の諸著作は漢字の魚名への言及なし.
  - 岸上氏は英文論文で江戸期本草書にも言及あり.
  - 木村氏著作は文理両の諸文献を縦横に引用.

# 本草綱目の和訳

- 1930(昭和5)年,「頭註國譯本草綱目」
- 各界の専門家の解説付き.
- 魚類の解説は木村重.
- 鮪(い)を中国産の魚類のなかから「ヘラチョウザメ」と比定.
- ヘラチョウザメは後に呼称が変更され, シナヘラチョウザメとなる.

# まとめ1：中国

- 鮪の字は古代中国の諸文献にも現れたが、魚種特定できる情報は無かった。
- 3-4世紀の文献では、記述と生物地理学的情報から、鮪がチョウザメ類3種に推定された。
- 「經典釋文」や「本草綱目」からはシナヘラチョウザメと考えられた。
  - これらは後世、おおいに引用されていった。

## まとめ2：日本

- 淡水大型魚の乏しい日本に漢字が輸入され、鮪の示す魚種は迷走した。
- 記紀萬葉のころは魚種が特定される情報は乏しい。
- 江戸期には鮪はマグロ類を示すようになった。
- 江戸期の一部の本草学者は、鮪がマグロ類ではないことに気がついたが、魚種は特定できないか、カジキ類等と考えてさらに混乱した。

## まとめ3: 近現代日本

- 得られた証拠からは、鮪の本来の魚種をシナヘラチョウザメに比定したのは木村重(1930)である.
- 岸上鎌吉は、1929年に揚子江流域で客死. 文献上はその影響の証拠は無い.

# 研究所感

- 木村重氏は半生をかけて集めた内外文献を上海から引き上げるときに失っている(木村滋子, 1981). 当方は電子データベースの活用で木村氏の思考を追跡したとも言える.
- 電子データベースは便利だが, 研究者の言い訳の一つが無くなった.

# 出典

- おもな出典は次を参照：武藤文人. 2013. 日本における鮪のマグロ類への比定の歴史. 東海大学紀要海洋学部「海一自然と文化」, 10(3):11-20.

[http://www2.scc.u-tokai.ac.jp/www3/kiyou/pdf/2013vol10\\_3/muto.pdf](http://www2.scc.u-tokai.ac.jp/www3/kiyou/pdf/2013vol10_3/muto.pdf)

- 追加文献

- 小野蘭山. 1805. 本草綱目啓蒙. NDL収蔵.

- <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2606179>

- 木村滋子. 1981. あとがきにかえて. *In* 木村重. 魚物語. 刊々堂出版社.



ご清聴ありがとうございました。

本研究にご協力いただいた方々に  
深く感謝の意を表します。